

# 2011 年度 入学 試験 問題

## 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、電算処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

小泉純一郎という政治家は五年半も政権を持続したわけで、自民党の歴史の中では佐藤栄作、中曽根康弘に並ぶ、最も成功したリーダーの一人である。しかし、成功の原因は佐藤、中曽根の場合と異なっている。佐藤、中曽根の場合、五五年体制の安定期に権力を握り、自民党長期安定政権の秘訣(ひけつ)に手をつけることなく政権を持続した。これに対し、小泉は自民党の側にいながら、自民党長期安定政権を支えた秘訣を否定、(1)「ホウキ(2)することを企て、(3)そのことを人気の源泉として最大限利用した。それゆえに、小泉は首相在職中、未曾有(みせう)の人気を持続し、権力者としての成功を収めた。また、自民党も表面上は二〇〇五年の総選挙で大勝し、往時の勢力を回復したように見えた。

しかし、小泉以後の自民党は、小泉の成功ゆえに苦境に立たされることとなる。自民党長期安定政権を支えた土台を破壊するという小泉の企図が成功したことが、以後の自民党に大きな影を落としているのである。二〇〇五年の郵政民営化をめぐる解散総選挙こそ、小泉流リーダーシップの絶頂であったが、同時に自民党の苦境を深刻化させる決定的な出来事でもあった。

(4)

こうした対立は、小泉時代にすぐに主要な政治争点とはならなかった。小泉が、「官から民へ」というスローガンの下、「公共セクター対市場」という対立軸を打ち出し、(5)市場側に属する非エリートの民間企業従業員をも味方に引き入れる政治戦略が奏功したことがその理由であった。小泉政権の構造改革は、市民や労働者がそのことを理解したかどうかは別として、「強者の自由」と「弱者に対する平等な再分配」という対立軸を生み出すことにつながったのである。

小泉自民党が、日本経団連を筆頭とする経済的エリートの要求を政策アジェンダ(政策課題のリスト)に採用し、政策の軸足を明確にしたということは、(6)「丁半張りの戦術」をホウキしたことを意味する。特定の主張に強くコミットするということは、それに反対する者を敵に回すということでもある。小泉自身はその巧みな政治的演出によって、対立軸をすり替え、構造改革の被害者にもその政策の受益者であるかのような錯覚を持たせた。しかし、そのような芸当が常に成功するとは限らない。

また、野党が政権を目指し、多数派を形成しようとする時、自民党と異なる軸足を持ち、対立の構図を演出しようとするであろう。実際、民主党は曲折を経て、自民党との対決路線、構造改革に対決する「生活第一」を確立した。これにより、政策的基軸をある程度異にする二大政党が、政権を目指して対決するという政党政治の仕組みが外観上はできた。小泉自民党が、経済エリートという片方に賭け金を張ったことが、皮肉にもそうした政党政治の展開をもたらす引き金を引いたのである。実質的な政策選択が自民党に政治的な亀裂をもたらしなない限りで、小泉の賭けは奏功した。しかし、そうした亀裂を回避することは、小泉というトクイナリーダーのとらえどころのなさにイキョ<sup>(8)</sup>していた。自民党にとって悲劇的なことに、二〇〇五年の総選挙における大勝ゆえに、その点の限界について悟ることができなかった。

次に、政治・行政の運営手法と統治システムにおける変化について整理しておきたい。小泉は、官僚との関係においても、与党との関係においても、旧来の統治システムを変革し、首相支配の仕組みを作り上げた。

まず官僚との関係について、小泉は財務省を除いて、官僚に依存するのではなく、これを改革の対象として敵視した。さらに重要なことは、与党との関係において、官僚と密接に連携している族議員の政策形成における動きを封じ、政策形成の方向づけと枠組みの設定を首相官邸の主導で行った点である。

トップダウン型のリーダーシップで改革を志向したという点で、小泉は中曽根と似ている面もある。しかし、中曽根時代には自民党の族議員は健在であり、たとえば国鉄民営化というテーマについても、首相官邸で方向づけを決めた際にはリーダーシップが発揮されたが、具体的な政策形成の過程では自民党運輸族が大きな役割を果たした。これに対して、郵政民営化の際には自民党の郵政族は、郵政省の官僚と同列の抵抗勢力として追いやられ、政策論議において出番はなかった。その点で、小泉時代の政策形成は、自民党の族議員を周辺化した点で大きく異なる。

そうした手法が最も威力を発揮したのが、二〇〇五年の郵政民営化を争点とする解散総選挙であった。参議院で民営化法案が否決されると、小泉は衆議院を解散して、民営化の是非を国民に問うとした。そして、衆議院でこの法案に反対した自民党の議員を除名し、それらの政治家の選挙区には別の公認候補を立てた。そして、選挙に圧勝した。自民党は政策問題で分裂すること

はないという政治学者の常識を覆し、民営化という路線に沿って自民党を純化した。また、総理・総裁としての人気を前面に出すことよって、選挙で地すべりの勝利を収めるという初めての経験<sup>(9)</sup>を自民党にもたらした。

小泉の新しさは、首相に権力を集中し、権力を積極的に行使し、首相の主導で政治を動かしていくという新しい統治モデルを示した点にある。この統治モデルは、現代イギリス政治の三位一体モデル、すなわち選挙における首相候補者、政権政策、選挙区における候補者の三つが緊密に結びついたモデルであった。首相が明確な政策争点を示して選挙を行い、個々の選挙区でも小泉チルドレンをはじめとする候補者がリーダーと一体となって同じ政策を訴えるという構図である。郵政民営化や小さな政府という小泉の政策については好悪がある<sup>(10)</sup>だろうが、九〇年代の政治改革によって目指した選挙の形を一応小泉が実現したことは認めなければならない。

この点で、小泉時代の統治の仕組みは、二〇世紀後半の自民党長期安定政権の時代と根本的に異なっている。首相の権力は、政府における政策の決定、衆議院の解散、党における人事や公認など政務と党務の両面にわたる。二〇〇五年の経験は、首相が行政府と与党の両方をコントロールできる大きな力を持っていることを教えている。

しかし、大きな成功の可能性は、同時に大きな失敗の可能性を意味する。トップリーダーの力量は多分に属人的なものであり、常に持続するという保証はない。逆に、この統治モデルを担うだけの力量を持たない政治家がリーダーの地位にいた場合、リーダーの無力、無能さがことのほか目立つ結果になり、自民党や政権に対する不信をかえって強めるという恐れもある。権力の集中と、政策や支持基盤に関する一点張りの戦術が裏目に出たのが、ポスト小泉の自民党である。小泉は自民党にとって束の間の中興の祖であったが、それゆえに以後の自民党のスイジャク<sup>(11)</sup>を早めたのである。

小泉という政治家に最もふさわしいせりふは、「我が亡き後に、洪水よ、来たれ」であろう。小泉政権の推進した構造改革は、社会を分断し、経済的不平等を拡大した。それは、建設業者、農家など自民党自身の地域の支持基盤を掘り崩し、さらに無党派層の中にも大きな不安や怨嗟<sup>えんさ</sup>をもたらした。

二一世紀に入ってからの日本の経済社会における最大の変化は、雇用の不安定化とそれがもたらす人々の生活不安である。一

九七〇―八〇年代の不況においては、日本の企業が首切りをせずコストダウンによって業績回復を図ったことが、日本的経営の美風とされていた。しかし、二一世紀に入ってからハリストラ、ダウンサイジングがまかり通るようになり、終身雇用は過去のものとなった。正規雇用は削減され、派遣、パート、アルバイトなどの非正規雇用が全労働力の三分の一を占めるようになった。当然労働者の賃金は減少し、仕事の不安定化は多くの人々の生活不安に直結した。

また、規制緩和と公共事業費・地方交付税の削減も、雇用不安をもたらした大きな要因であった。労働分野の規制緩和は、派遣労働を正当化し、低賃金労働を広げた。公共事業費や地方交付税の削減は、特に非大都市圏における雇用の源であった建設業に壊滅的な影響を与えた。

これらの理由によって、二一世紀の日本では不平等と貧困が拡大した。さらに、小さな政府路線によって社会保障に対する財政支出が抑制されたことも、弱者の生活苦に追い打ちをかけた。総中流社会の終焉は、政治の世界にも大きな衝撃を与えずにはおかない。二〇世紀日本の政治はポジティブサム・ゲーム、つまりゲームの参加者すべてが何らかの利益を得られる政策形成ゲームであったのに対して、小泉以後の日本の政治はゼロサム・ゲーム、つまり誰かが損することによって他の誰かが得をするという政策形成ゲームである。したがって、政策形成をめぐる利害対立は、政治的な対立軸の形成につながりやすい。

不平等と貧困が広がる生きにくい社会の到来は、普通の人にとってはサイカである。<sup>(13)</sup>しかし、だからこそ政治が必要とされているということもできる。現在の不平等社会においては、人は自分の生活をよりよくする政策を見分け、そうした政策を実現する政党を政権の座につけるといふ政治的な努力を払わなければならない。小泉時代の経験を通して、スローガンだけの改革にすべてを託すことの危険を多くの国民は思い知ったのである。

(山口二郎『政権交代論』による)

〔問一〕 傍線(1)(7)(8)(12)(13)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)(9)(10)の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(3)(6)(11)の説明としてもっとも適当なものを各群の中から選び、符号で答えなさい。

(3) 未曾有の

- |         |        |       |       |
|---------|--------|-------|-------|
| D       | C      | B     | A     |
| あるはずがない | 後に例がない | 前例がない | 減多にない |

(6) 丁半張りの戦術

- |                      |                        |                          |                            |
|----------------------|------------------------|--------------------------|----------------------------|
| D                    | C                      | B                        | A                          |
| 対立する両者の利益をともに切り捨てる戦術 | 対立する両者の利益をともに守る姿勢を示す戦術 | 対立する両者のいずれの利益を守るか鮮明にする戦術 | 対立する両者のいずれの利益を守るかあいまいにする戦術 |

(11) 属人的な

- |                     |                   |             |           |
|---------------------|-------------------|-------------|-----------|
| D                   | C                 | B           | A         |
| その人に従う人がどれだけいるかで決まる | その人が属している集団により決まる | その人が持つ財力による | その人個人に属する |

〔問四〕 次の文A～Eは、空欄(4)に入る五つの文を順不同で並べたものである。文脈にしたがって正しい順序に並べ換えたとき、

四番目に来るものはどれか。左の中から選び、符号で答えなさい。

A 小泉政権が推進した構造改革路線は、民営化、規制緩和、歳出抑制・削減を基調としたものであった。

B まず、政策面での変化を整理しておこう。

C これらの政策は、均質的な社会を解体し、グローバル化に対応できるエリート層と、政策的保護を必要とする非エリート層の間の利害対立を作り出した。

D これは、経済のグローバル化に対応し、世界レベルの競争に伍していききたい経済界のリーダーにとっては、望ましい政策であった。

E 他方、従来の雇用や公共事業の仕組みの中で仕事と生活を確保してきた普通の人々にとっては、利益の剥奪はくたつを意味する。

〔問五〕 傍線(5)「市場側に属する非エリートの民間企業従業者をも味方に引き入れる政治戦略が奏功した」を別の言い方で述べ

ている部分を、傍線(5)より後の本文中から抜き出し、始めと終わりの五字で答えなさい。(句読点は一字に数えない)

〔問六〕 次のア～クのうち、本文の筆者が小泉政権の政策や政治の特徴と見なしていると思ふものにはA、見なしていないと思

うものにはBの符号で答えなさい。

- ア 労働者の解雇や企業規模の縮小による業績の回復を許す政策
- イ 政府の負担や努力により、社会の構成員すべてが利益の分配にあずかれるようにする政策
- ウ 改革の方向付けは首相が行い、具体的な政策形成には族議員を活用する政治運営
- エ 経済的エリートに要求に軸足を置く政策
- オ 雇用の維持と生産コストの削減による業績の回復を促す政策
- カ 首相の個人的な力量により与党と政府を意のままに動かす政治
- キ 自分の退任後をも考慮した自民党の再建に取り組む政治
- ク 非正規雇用の拡大と賃金の低下をもたらす政策



二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

「写真における異文化表象」とは何だろうか。まずはそれを鮮烈な印象で語っている写真家・中平卓馬のことばから引用したい。

私は同世代の多くの写真家たちがアメリカへ行き、ヨーロッパ、あるいは遠くアフリカ、ラテンアメリカへ出掛けて撮ってくる写真に感動させられることがほとんどない。

(1)、それらの写真には、私がまだ見たこともない、(2)、アメリカ西部の広大な平原と眩い太陽の光とそこ

に生きる人々の荒々しくまた明るい顔が写されており、その土地の独特な自然と事物のあり様が印されてはいる。(3)

私はすぐに、あれこれの土地、あれこれの場所に出向いてゆくならば、ただその気になりさえするならば、そのようにひと  
びとは生き、事物は存在しているのだろうと、一気にすべてをへ了解してしまふのだ。(4) すべてへ了解された

ものは、すでにそのことよって私を驚かしはしないし、むしろ脅かすことなどあろうはずはない。私は急速に、これらの  
写真とそこに写されてあるものに無関心になってゆく。(5) 当然すぎるではないか、いつだってそれらの写真を前に

して感じるのはそのような白々しい思いである。

一言で言ってしまうえば、これらの写真には一様に、旅行者だけがもつ甘えた感傷とそれと裏腹にあるつきなみな希釈された好奇心がべつたりと貼りついているということなのである。  
〔決闘写真論〕

ここに語られているのは何よりも写真とエキゾチシズムの問題であるが、中平は他の章でも「インドやネパール」に憧憬の念を持つ六〇年代ヒッピー文化の焼き直しのような映像に、強い警戒の感をもつ。彼は、非西欧に脱出口を求めながらも、最後はパリの街路へと回帰するシュルレアリストの例を挙げて、いったん旅を拒み、見知らぬ者のように街路を凝視する中にこそ、

世界と私との緊張を取り戻せないかと自問するのだ。そこには、現代世界の溢れかえる映像情報によって、型通りになってしまった異文化を追認するしかない表現への苛立ちがある。

元来、十九世紀西ヨーロッパで誕生した写真術にとって、異文化の撮影は最初期から企図された領域だった。東方はその恰好の対象となる。一八六〇年代にはすでにエジプトのルクソールで旅行者向け画像を生産するアントニオ・ベアトのスタジオが存在し、一方ベイルートに設立されたボンフィル家の会社では、一八六七年時点で一万五千点もの観光者用プリントの「商品」を備えていたと聞けば、東方写真の隆盛ぶりに驚いてしまう。

こうして十九世紀後半、東方はむしろ固定化された憧憬や空想の対象となる。ここで言う「東方」とは、エジプトやチュニジア、モロッコなどの北アフリカからギリシャ、中近東、トルコまでをも含む広い地域概念である。そして最初「東方」に対する知識の総体を意味していた「オリエンタリズム」という用語は、西ヨーロッパの植民地支配体制が拡大される時代下、明らかに別の意味を帯びるようになる——それを精緻に明るみに出したのが、エドワード・サイードの名著『オリエンタリズム』であった。サイードによればオリエンタリズムとは「近代世界の覇者である西欧が、征服の対象である一つの世界を認識し、表象する行為を通して、自らと異なる者、〈他者〉として定立し、その〈他者〉との対比によって自らを〈主体〉——征服し、認識し、表象する能力の独占者——として定立することを可能ならしめる（完全に意識化されていないが、イデオロギー的に機能する）言説」である。フランス絵画の領域ではすでに一八〇四年にアントワーヌ・グロの作品「ヤッファのペスト患者を見舞うボナパルト」が、官展における最初のオリエンタリズムの作品とされる。その後往々にして画家さえ赴いたことのない東方地域の想像世界は、豪奢、エロス、暴力性といった要素を伴い、東方的風景や人物たちに投影され、果ては常套化される図像となって流布していったのであった。

先に引用した中平卓馬の評言は、<sup>(6)</sup> 旅におけるエキゾチシズムの詐術を見抜いたものだが、これに、<sup>(7)</sup> 支配者側の人間が他者としての異文化を見る眼差しの政治性を加味すれば、そのままオリエンタリズムの問題系に転移する。しかも表現者にとって、未知の世界の、異なる事物の発見であったつもりが、実に何百年に及ぶ文学や映像の常套化した表現の焼き直しにすぎないとすれば、

その表現者の「眼の記憶」の中に、エキゾチシズムやオリエンタリズムはすでに埋め込まれていることになる。中平卓馬は、こうした無意識下の言説を自らに問うことのない写真家＝旅行者に鋭い問いをつきつけていると同時に、そうした憧憬を共有する観者の側をも批判しているのである。

(今橋映子『フォト・リテラシー』による)

注 エドワード・サイード……パレスチナ系アメリカ人の文芸批評家(一九三五―二〇〇三)。

アントワーヌ・グロ……フランスの画家(一七七―一八三五)。

〔問一〕 空欄(1)～(5)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

- A だが      B むろん      C そして      D あまりにも      E たとえば

〔問二〕 本文中の傍線(6)「旅におけるエキゾチシズムの詐術」の指し示す内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 異郷の地の独特な自然や生活や事物を目にしたときに覚える驚きや感動というものも、その多くは実際には旅の甘えた感傷とそれと裏腹にあるつきなみな好奇心が引き起こす反応にすぎない。

B 異郷の地の独特な自然や生活や事物を目にしたときの旅行者の驚きや感動は、旅していない者にとっては白々しく感じられる旅の甘えた感傷とそれと裏腹にあるつきなみな好奇心でしかない。

C はじめて旅した異郷の地の独特な自然や生活や事物であっても、映像情報が溢れかえる現代世界にあつては、それまでどこかで一度は映像で目にしたことがある了解ずみの異文化にすぎない。

D 旅したことのない異郷の地の独特な自然や生活や事物の映像を目にしただけで異文化を了解したと感してしまうのは、実は現代世界の溢れかえる映像情報によってもたらされる錯覚でしかない。

〔問三〕 本文中の傍線(7)「支配者側の人間が他者としての異文化を見る眼差しの政治性」の指し示す内容としてもっとも適当なものを選べ、符号で答えなさい。

A たとえば近代世界の覇者である西欧の人間が東方に目を向けるとき、支配の対象である他者として見るか、憧憬の対象である異文化として見るかは、その人間の政治的立場によって異なる。

B たとえば近代世界の覇者である西欧の人間にとって、東方は支配の対象であるとともに芸術的想像の源でもあるが、その中から生まれる芸術作品は必ずしも政治的意図を反映したものではない。

C たとえば近代世界の覇者である西欧の人間が東方の文化を見るとき、眼差しの中にあるのは、他者の異文化への憧憬というより、むしろ豪奢、エロス、暴力性といったイメージへの期待である。

D たとえば近代世界の覇者である西欧の人間が東方を見るときには、東方を自らと異なる他者として位置づけ、自らをその他者を征服し認識し表象する能力を有する主体として位置づけている。

〔問四〕 次のア～エのうち、本文の内容と合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア 十九世紀、ルクソールやベイルートに旅行者向け画像を生産するスタジオや観光者用プリントを備える会社が設立され、東方写真が世界に流通するようになったことが、東方のイメージを大きく変える契機となった。

イ もとは東アジアを指す概念だった東方という用語は、オリエンタリズムと結びついたことよって、エジプトやチュニジア、モロッコなどの北アフリカからギリシャ、中近東、トルコまでを含む広い地域概念となった。

ウ 表現者が未知の世界の新しい事物を表現したつもりでも、それが常套化した表現の焼き直しになっているとすれば、表現者の中に無意識のうちにエキゾチシズムやオリエンタリズムが記憶されていることになる。

エ 中平卓馬の評言は、型通りになってしまった異文化を追認するしかない表現への苛立ちであり、そうした問題を自らに問うことのない旅行者や写真家、さらにはその眼差しを共有する鑑賞者への批判でもある。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

鳥羽法皇の女房、小大進といふ歌よみありけるが、待賢門院の御衣一重ね、<sup>(1)</sup>失せたりけるを負ひて、北野に籠もり、祭文書き<sup>(2)</sup>て、まもられけるに、三日といふに神水をうちこぼしたりければ、まもり檢非違使、「これに過ぎたる失やあるべき。出で給へ」と申しけるを、小大進泣く泣く申すやう、「おほやけの中のわたくしと申すはこれなり。いま三日の暇をたべ。それにしるしなくは、われを具し出で給へ。恨みあるまじ」と、みめ、かたち足らひ、<sup>(3)</sup>愛敬づきたる女房の、うち泣きて申しければ、檢非違使もあはれに思ひて、<sup>(4)</sup>のべたりけるほどに、小大進、

思ひ出づやなき名たつ身は憂かりきと現人神になりし昔を<sup>(5)</sup>

とよみて、紅の薄様一重に書きて、御宝殿におしたりける夜、鳥羽法皇の御夢に御覽するやう、よにけたかく、やむごとなき翁の、束帯にて御枕に立ちて「やや」とおどろかし参らせて、「われは北野の右近馬場の神にて侍る。めでたきことの侍る。御使たまはりて、見せ候はむ」と申し給ふ、とおぼしめして、<sup>(6)</sup>うちおどろかせ給ひて、<sup>(7)</sup>「天神の見えさせ給ひつる。いかなる御事のあるぞ」と、「見て参れ」とて、「鳥羽の御馬屋の御馬に、北面の者を乗せて、馳せよ」と仰せられければ、馳せて参りて見るに、小大進は雨しづく<sup>(8)</sup>と泣きて候ひけり。

御前に紅の薄様に書きたる歌を見て、これを取りて参るほどに、<sup>(9)</sup>いまだ参りつかぬさきに、鳥羽殿南殿の前に、かの失せたる御衣をかづきて、さきをば法師舞ひ、しりをば敷島とて待賢門院の雑仕なりけるが、<sup>(10)</sup>かづきて、獅子に舞ひて参りたりけるこそ、天神のあらたに歌にめでさせ給ひたりけると、めでたく侍れ。

すなはち小大進をば召しけれども、「かかかる問拷を負ふことは、心わろきものにおぼしめさるるやうのあればこそ」とて、やがて仁和寺なる所に籠もり居にけり。

注 待賢門院……鳥羽法皇の中宮。藤原璋子。 北野……北野天満宮。 祭文……自分の言動に偽りのないことを神に誓う言葉。 神水……神に供える神聖な水。 たべ……下さい。 薄様……薄く濺すいた和紙。 束帯……朝廷の正装。 北面……院御所を守護する武士。 問拷……とがめ。

〔問一〕 傍線(1)「失せたりけるを負ひて」(2)「まもられける」は、それぞれどのような状況を言っているのか。もつとも適當なもの左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 失せたりけるを負ひて

- A 亡き待賢門院の衣を形見にして
- B 形見の衣の行方を祭文に託して
- C 無くなったはずの衣を背負って
- D 衣を無くした嫌疑をかけられて
- E 衣を無くした責任を自ら感じて

(2) まもられける

- A 保護なさっていた
- B 様子を拝見していた
- C 大切にされていた
- D 警護されていた
- E 監視されていた

〔問二〕 傍線(3)「愛敬づきたる」、(6)「おどろかし」の解釈としてもっとも適當なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(3) 愛敬づきたる

- A 容姿が魅力的でかわいらしい  
B 見た目に愛想のかけらもない  
C 性格がかわいらしい  
D 容貌がやつれている

(6) おどろかし

- A びっくりさせ  
B 呼び起こし  
C 威嚇し  
D 焦らせ

〔問三〕 傍線(4)「のべたりける」は、何を「のべた」のか。もっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 慰めの言葉      B 無くした御衣      C 籠もる日数      D こぼした神水      E 謝罪の言葉

〔問四〕 傍線(5)「現人神」とあるが、現人神になったのは誰か。その姓名を漢字で答えなさい。

〔問五〕 傍線(7)「申し給ふ」、(8)「うちおどろかせ給ひ」、(9)「参りつかぬ」の主語を左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

A 鳥羽法皇      B 翁      C 小大進      D 馬      E 御使



〔問六〕

傍線(10)「かづきて、獅子に舞ひて参りたりける」とあるが、法師と雑仕はなぜそのような状態で参上したのか。その理由としてもっとも適当なものを、左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分たちが御衣を無事に取り返したことを天神に賞賛され、喜んだから。
- B 自分たちが御衣を盗んだことを天神に見とがめられ、後悔したから。
- C 天神の怒りをおそれた法皇が、彼らに天神に衣を奉納する舞をさせたから。
- D 天神の怒りにふれた法皇が、その怒りを鎮めるための舞を彼らに奉納させたから。
- E 無実を訴えた小大進の歌に天神が感応し、御衣を返すため彼らを踊らせたから。